名北の空の下

署長室から

名古屋北労働基準監督署長　越川（こしかわ）　稔（みのる）

23

行く川の流れは絶えずして

鴨長明が方丈記で著した〝無常観〟が、東日本大震災の後、たびたび取り上げられた。

昨年のＮＨＫの大河ドラマでは、平清盛（＝平家）が題材となり、これもまた〝諸行『無常』〟の世界である。

もちろん長明が方丈記で著したのは、無常観のみではない。ところで、この無常観には、〝無情〟につながるような語感があって残念であるが、無常とは文字どおり〝常ならず〟であって、絶えず変化しているという意味ではないかと思っている。

〝驕れるものは久しからず〟、〝猛き者も終には滅びぬ〟というように絶対だと思っていたものにも、終わりがあることを表しているに過ぎないと思う。

夏に「同窓会」があったので、久しぶりに出席したが、「ちっとも変わらないなぁ」といった会話が交わされていたので、「ずいぶん変わり果てたなぁ」のまちがいではないかと言いたかったが、変化の形や速度には差があるということかも知れない。しかし、ちっとも変わらないというのはやはり言いすぎで、あまり変わっていない、と言うべきだろう。

しかし、外見からは分からない内部の変化もある。年齢を重ねてくると、老化や長年の生活習慣からくる様々な症状（変化）が起こっている。若い頃はこれくらい、と思っていたことができなくなり、無理すればケガや病気となって現れる。〝過信〟というやつである。これとよく似たものが〝安全神話〟というやつかも知れない。ちゃんと考えれば分かりそうなものを、目や耳をふさいでしまう、都合のいいことだけを信じるようなものだと思う。

中央道トンネルの天井板落下事故などもふさいだ口かも知れない。

私がこの職場に入った頃は、まだ重化学工業が隆盛で、労働災害も多かった。事故が起こるのは当たり前で、死亡災害１００件未満という目標を局が掲げると、非現実的だと署の職員からブーイングが起こったものだった。今や50件を切ろうとしている。これも労働災害防止の努力がもたらしたもので、労働に伴う危険が劇的に減少しているわけではない。災害が多いことを〝常〟としてはならないのであって、取組が継続しなければ、それこそ〝油断〟すれば、確実に災害に結びつく。

余談だが〝油断〟とは、延暦寺の法灯を灯し続けるために、油を絶やさない、ということが語源だとか。

個人の生命には限りがある（遺伝子を次代に伝えていくことが人間の存在＝生存意義である）が、営為を引き継いでいくことが使命かも知れない。働きかけることで、〝常〟であったものを変えると言うことである。源氏と関東武士団が平家を倒したように。

ところで、東日本大震災の際に、津波で家族や家を失った人と原発の放射能の影響で家族を失った人や故郷を追われた人の感じた〝無常〟感は同質のものなのだろうか。

イラスト・伊藤栄章